

<講演抄録>2. 五苓散が奏効した三叉神経痛症例の検討(第24回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	猪狩 俊郎, 佐藤 敦, 齊藤 哲夫, 高橋 哲, 宋 時澤, 森川 秀広, 安部 道, 末永 美代子, 福田 雅幸, 桜田 素雪, 手島 貞一
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	13
号	1
ページ	65-65
発行年	1994-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/31472

第24回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成5年12月10日

場所：東北大学歯学部B棟1階講義室

—— 一般演題 ——

1. 下顎臼歯部橋体下にみられた骨過形成

(subpontic osseous hyperplasia SOH) の1例

鈴木康司, 越後成志, 手島貞一(口腔外科2), 堀内 博(歯科保存1), 小野寺 健, 大家 清(口腔病理)

下顎臼歯部のブリッジポンティックの下に現れる骨の過形成は極めてまれな疾患であり, 原因は不明だが, 咬合や食片圧入などの何らかの刺激によるものと考えられている。今回我々は右側下顎臼歯部のブリッジポンティックの下に現れた骨過形成(subpontic osseous hyperplasia SOH) の1例を経験したので報告した。患者: 42歳, 女性 主訴: 右側下顎臼歯部ブリッジポンティック下の歯肉部の精査

現病歴: 十数年前に⑦⑥⑤に完全自浄型のブリッジを装着。明確な時期は不明だが, ⑥ポンティック下の部位が徐々に腫脹し, ポンティック下を閉塞するが症状がほとんどなかったためそのまま放置。齶蝕治療のため本院保存科を受診したところ主治医より同部の腫脹を指摘され精査のため平成5年8月20日当科紹介され受診。全身所見, 口腔外所見では異常所見は認めない。口腔内所見では, ⑥のポンティック下を閉塞するように同部の腫脹がみられたが発赤, 疼痛などの所見は認められない。触診では骨様硬で波動や羊皮紙様感は認められない。x線所見では, ⑥ポンティック下を閉塞する様に半球状の不透過像がみられた。平成5年8月30日局所麻酔下に腫瘤切除を施行した。骨ノミにて粘膜とともに膨隆していた骨を一塊として削除し創面をサージカルパックにて覆い手術を終了した。病理組織学的に osseous hyperplasia と診断された。術後経過は良好で, 現在のところ再発傾向は認められない。しかし, 再発した報告もあるので今後長期の経過観察が必要と思われる。

2. 五苓散が奏効した三叉神経痛症例の検討

猪狩俊郎, 佐藤 敦, 齋藤哲夫, 高橋 哲, 宋 時澤, 森川秀広, 安部 道, 末永美代子, 福田雅幸, 桜田素雪, 手島貞一(口腔外科2)

三叉神経痛患者5例(何れも第3枝)に対し五苓散を投与し検討を行った。

症例1: 48歳女性, 問証。カルバマゼピン(以下CBZ) 800 mgで疼痛消失を見, 五苓散単独維持に切り替えたところ疼痛消失。

症例2: 82歳男性, 虚証。高血圧症で服薬中。五苓散単独投与で疼痛消失。

症例3: 65歳女性, 虚証。種々の既往に加え, 多種薬剤に対し胸部圧迫感を生じる事あり。CBZ 200 mgにて疼痛消失をみたものの, ふらつき, 胸部圧迫感が生じたため, 五苓散投与に切替えた。副作用もなく疼痛緩解は著明。

症例4: 41歳男性, 実証。五苓散の単独投与は無効で, CBZを開始し600 mgから疼痛軽減傾向を認め1,200 mgに至り疼痛消失。その後五苓散投与を再開し, CBZは400 mgまで減量。治療薬としては無効だが, 維持療法にやや有効。

症例5: 35歳男性。少量の鎮痛剤でも傾眠傾向の既往あり。五苓散単独投与で無効。CBZを開始し, 1,000 mgで疼痛消失。日常生活不能のため脳神経外科にてJanetta手術を施行。手術後疼痛消失。五苓散全く無効。

五苓散の適応となる問証, また適応外でも虚証には有効以上の結果を得たが, 実証で他覚的に明らかに疼痛が激しい症例には単独投与での疼痛制御は困難だった。

五苓散は問証, 虚証症例への使用, またCBZで傾眠傾向を生じる症例, CBZの減量目的での使用には有用である可能性が窺われ, アルコールブロック等の施行の前に, 一度投与を試みても良い薬と考えられた。